日本人大学生の
敬語使用に関する事例研究

有　田　由紀子

1．はじめに

敬語に関して日本人がどう考えているかという点に関して興味深い調査がある。一つは文化庁が2004年に実施した「国語に関する世論調査」で，「今後とも敬語は必要である」という意見が回答者全体の96.1%に支持された（文化審議会　2007)。また，1991年のNHK首都圏調査では，「今後予想される日本語の変化で，これはイヤだ，こうなっては欲しくないと思うもの」のトップに「敬語が使われなくなる」が選ばれた（井上　1999)。つまり，日本人の多くが，敬語は日本人にとってなくてはならないもので，これからもなくならないと考えているといえるだろう。

このように，敬語はこれからも必要であると考えられていることが示される一方で，日本の大学生が敬語を使えなくなったというようなことをよく耳にするようになった。大学生の日本語能力及びコミュニケーション能力の低下までをも懸念する声もしばしば聞かれる。日本人大学生の敬語に関する意識は，日本人社会人のそれとは異なるのであろうか。本研究では，日本の大学生の敬語使用に対する意識を観察することを目的として，福岡市の二大学で行った敬語使用の基準に関する調査を基に事例研究を行った。

二節，三節では，事例研究のための調査分析に必要な概念として，「敬語の役割」と「敬語使用の基準」に関して考察した。四節では，大学生の敬語

使用の基準調査の結果とその考察が述べられる。

2．敬語の役割

敬語に関して考える際に，敬語の役割を把握しておくのは重要である。まず，2007年２月に文化審議会から出された『敬語の指針』によると，敬語は「コミュニケーションを円滑に行い，確かな人間関係を築いていくために欠かせないもの」であると位置づけられている。そして，その重要な役割として，相手やその周囲の人，そしてその場の状況に関する話し手の気持ちを表現する言語表現として用いられる点を指摘している。言い換えると，円滑なコミュニケーション及び，よりよい人間関係構築のための重要な道具として敬語がとらえられているといえる。

この「よりよい人間関係を作る円滑なコミュニケーション」に貢献している敬語であるが，先行研究を調べてみると，興味深いことに，敬語の役割に関して二つの解釈があることに気がつく。ここではこれらの解釈について，詳しく見てみようと思う。一つ目の解釈は，敬語の使用によって「お互いに心を和ませ，人と人との接触をあたたかにする（大石・林　2000)」作用が生まれるという立場で，敬語の役割を尊重・いたわりの精神に基づいて相手を立てることと考えるものである。この立場では，敬語は相手に対する配慮や，尊重しようとする意識・意志の表現ということになるし，敬語を使うことで少なくとも相手に敬意を示す意図があることを表現しているといえる（菊池　1996，蒲谷・川口・坂本　1998，萩野　2001，文化審議会　2007)。つまり，相手をいたわり不快な思いをさせないようにするために敬語を使用し，それが良好で円滑な人間関係を作ることに繋がるという考え方である。

一方で，敬語を使うのは，自分を守るためという考え方がある。よそよそしい関係，つまり親疎の関係でいうと疎の時に，「敬遠」を表すために敬語を使用し，相手との心的距離をとるという立場である（野元　1987，牧野　1996，井上　1999)。内心は疎んじて親しくしなかったり，意識して避けた

りしているのだが，礼儀として表面は敬うような態度をして，相手の機嫌を損なわないようにするために敬語を使用する。そうすることで自分に不利を招く危険を回避することができるのである（土居　1991）。

この二つは，相手を不快にさせないという点では共通しているが，相手を尊重しいたわる気持ちから，温かいなめらかなコミュニケーションを目指すのか，相手を敬遠し自分を守る気持ちで，安全なコミュニケーションを目指すのかという点で異なるといえる。しかし，これらは相互に相容れないものではなく，一人一人が一個人として場面に応じて自分の意志で使い分けている，敬語の基本的機能である。例えば，自分の好きな上司と話す時には，その上司を真に尊重する気持ちから敬語を使い，お互いに気持ちのよい良好なコミュニケーションを取ろうとするだろう。しかし，自分の嫌いな上司と話す時には，その上司を真に尊重しているかどうか，楽しいコミュニケーションが取れるかはあまり問題ではなく，上司の機嫌を損ねないようにするために，礼儀として敬語を使用するという具合である。

このように考えると，敬語とは相手に対する「尊重」と「敬遠」の気持ちを表す言語表現であるといえる。そして，どちらの場合も円滑な人間関係・コミュニケーションを目的にするのであるが，話し手の意図によって，それが好意的で良好な円滑さなのか，さしさわりないという円滑さなのかが決まる。この違いがきちんと説明されていなかったために，敬語は「尊敬の念にたって使われるべきである」といった記述と，「敬語を使うからといって心底尊敬しているとは限らない」というような矛盾するように見える記述が並存してきたように思われる。

3．敬語使用の基準

さて，敬語を考える上でもう一つ重要なのは，敬語使用の基準である。役割や機能が理解できても，使用基準が分からなければ実際に敬語を使うことは難しい。この節では，敬語使用の基準に関して，先行研究を概観しながら

考察する。

3.1.　上下関係

多くの先行研究では，日本語の敬語を使う基準に関して，かつては目上・年上などの上下関係が一番大きな基準であった，または現在でも上下関係に基づいて敬語が使用されていると述べられている（土井　1991，菊池　1996，蒲谷・川口・坂本　1998，井上　1999，大橋・林　2000，野元　2000，萩野　2001）。また，敬語が用いられる多様な場面や人間関係を考慮し，それぞれに共通する基本的な指針を示すことを目的としている文化審議会の『敬語の指針』でも，敬語は相互尊重を基盤として使用され，その際に年齢の違い，経験・知識・能力などの違い，社会集団の中での立場や階層の違いなどに基づく様々な「上下関係」の存在が前提となると述べられている。

どの先行研究にも共通するのは，この「上下関係」とは，昔風に形式的な身分階級に基づく上下ではなく，年齢や相手の社会的地位・立場に基づいた上下関係であるという点である。社会集団の中での立場の違い，例えば，教師と生徒の関係，先輩と後輩の関係，また目上・目下の関係はこの「上下関係」に属するといえるであろう。

3.2.　ウチ・ソト関係

そして，もう一つの大きな基準ととらえられているのは，「親疎関係」，または「ウチ・ソトの関係」である（菊池　1996，牧野　1996，蒲谷・川口・坂本　1998，井上　1999，大橋・林　2000，野元　2000，Arita　2001，草柳　2001，萩野　2001，Usami　2002）。これを基準にした場合，相手との親しさがないとき，つまり，よそよそしい関係である「疎」の場合に敬語を使用するということになる。牧野（1996）によると，敬語は原則として目上でかつソトに属する大人，言い換えると，目上で自分が共感をもつ関係にいない人，を高めるために用いられるという。例えば，家族や親友に対しては，自分の共感領域であるウチに属することが多いので，敬語は使わず，自分の上

司はその領域外であるソトに属するので，敬語を使用するという具合になる。本研究では，例えば，会社内で上司が部下と親しくなくても，その部下をウチの人物とみなして敬語を使わない場合など，「親疎関係」で捉えられない人間関係も「ウチ・ソトの関係」でより包括的に捉えられるとの立場から，「ウチ・ソト関係」を基準と考えたい（Arita　2001）。

ここまでで，なぜ3.1.で「上下関係が一番大きな基準であった」と過去形で述べられていたのかという疑問がわいているかもしれない。これは，多くの研究で，最近特に若者の間では，「上下関係」という基準から「ウチ・ソト関係」に変わってきているとの認識があるためである。ある学者は「敬語の民主化」と呼んでいるが，これは敬語を「上下の関係の違いよりはむしろ，平等な人々の間での役割や親疎」によって使い分けようとする傾向のことである（井上　1999）。これは敬語の使用パターンが話し手と聞き手の間で双方向的になっていることから，「左右の関係」の敬語と呼ばれることもある（井上　1999，大橋・林　2000）。この基準の推移に関しては，多くの学者達によって広く認められているように感じられる。この傾向が大学生の間でも起きているのかなどに関しては，事例研究の調査結果の中でもう少し考えたい。

3.3.　場

上で述べた二つの基準は，大抵の敬語学者及び日本語使用者に支持されている基準である。その二大基準に加えて，注目したいのは，「場」という基準である。これは，『広辞苑第五版』の「場」の定義にあるように，物事の行われる場所・時機，現象の起こる状況をさす。つまり敬語が使われる場面や，敬語が用いられる際の話の内容などを意味する。場面に関しては，例えば，改まった場なのかくだけた場なのか，上品さを表したいのか，距離を置くことで怒りを表したいのか，などが関わっている。話の内容に関して考えると，恩恵・受恵関係，例えば，相手に負担がかかる内容なのかどうか等が問題になる。この概念は，はっきりとした言葉で定義されてきてはいないが，

多くの先行研究に記述が見られる（菊池　1996，蒲谷・川口・坂本　1998，井上　1999，野元　2000）。

この概念に注目する理由は，この「場」という基準によって，大きく変化してきているとされる敬語の使用法を，体系的にとらえることができると考えるからである。今までこの基準が大きく取り上げられなかったのは，昔は年齢や身分に基づいた「上下関係」を基準に敬語が使われることがほとんどで，今ほど人間関係の捉え方が複雑ではなかったからではないかと考えられる。人間関係が多様化した現在では，様々な状況・場面に応じて敬語も使い分けなければならなくなったといえる。よく話題になる，特に若者達による敬語使用のゆれといわれている現象は，この「場」という概念を若者達が認識し始めたことによる，敬語の多様化の一例ではないだろうか。

4．一つの事例研究

本研究では，今までみてきた，敬語使用の基準とその推移に関して，これらの基準が日本人大学生の間でどのように用いられているのか，また，先行研究で指摘されている，「上下関係」から「ウチ・ソト関係」への推移が観察可能か等を調べる簡単な調査を実施した。大学生を対象とした，敬語使用の基準を尋ねるアンケート調査である。

4.1.　参加者・方法

参加者は福岡市にある二つの大学，福岡女学院大学と九州産業大学の１年生と２年生の計159人で，男女の内訳は女子学生100名（福岡女学院大学91名，九州産業大学９名），男子学生59名（九州産業大学59名）である。年齢層は18歳から21歳であった。

調査は，年齢と性別だけを書いてもらう無記名のアンケート形式で行った。敬語使用の基準に関する質問は二問あり，一問目は，日本語でどんな時に敬語を使うかという問いで，自由に答えを書いてもらう自由回答方式を取り，

二問目は敬語を使う基準をいくつかの選択肢から選択する，複数回答可能選択方式で行った。

今回の調査は，福岡市の二大学という狭い範囲で行われ，回答者数も159名と限られた数であるため，日本人大学生の敬語使用の実態を正確に示すことは目的とせず，予備実験的に傾向を見るための一つの事例研究として行ったということを補足しておく。

4.2. 結果１：いつ敬語を使うか

第一問目の自由回答形式の質問を集計した結果，様々な回答が見られた。上記の基準と比較対照してみたところ，表現方法は様々であったが，すべての回答が三つの基準のいずれかに分類可能であった。以下にその回答をそれぞれの基準ごとに示していく。尊敬の念を表す時という回答に関しては，相手を敬う念からその人を立てるという解釈に基づき，「上下関係」に分類した。詳しい人数は後方に付記することにし（表１），ここでは回答の内容を示すものである。

(1) 上下関係

目上の人と話す時，年上の人と話す時，先輩と話す時，年配の人と話す時，先生と話す時，尊敬している人と話す時，敬意を表す時，謙遜する気持ちを表す時

(2) ウチ・ソト関係

初対面の人と話す時，なじんだ友達以外・親しくない人と話す時，相手と距離がある時，知り合って間もない人と話す時，苦手意識がある人と話す時，親戚と話す時，近所の人と話す時，見知らぬ人と話す時

(3) 場

改まった場で話す時，公共の場で話す時，使わなくてはいけないと感じ

た時，使わないと相手に不快な思いをさせると思った時，気を使う時，気まずい時，自分の立場が危うい時，仕事で接する人と話す時，バイト先の人と話す時，接客する時，電話で話す時，挨拶をする時，相手に敬語を使われた時，頼み事をする時，謝る時，何かを買う時（店員に対して），お礼を言う時，基本的にいつも敬語を使う

「上下関係」に分類された回答からは，以前から指摘されていた目上の関係，年上の関係の他に，先生や先輩，年配の人といった具体的な回答も多くみられた。そして，数は少なかったが，尊敬や謙遜の念を表すためという回答も得られた。若者世代では敬語の使用意識は単に目上・目下という「上下関係」から，「ウチ・ソト関係」を重視する方向に向かっているとする先行研究が多く見られた中で，この結果を見ると，今回の調査に参加した大学生は，「上下関係」にも配慮して敬語を使用しているといえる。

次に，「ウチ・ソト関係」に目を向けると，初対面の人，親しくない人，距離を感じる人，知り合って間もない人，苦手意識がある人，親戚・近所・見知らぬ人と話す時など，自分との距離ともいえる「ウチ・ソト」を測るものさしの種類が大変多いことに気付く。これは，人間関係の構築パターンが複雑化していることを示唆しているし，学生達がこの複雑化した人間関係に敏感に反応し，敬語使用にも適応しようとしているともいえるだろう。

また，見知らぬ人という回答がかなりあったことはとても興味深い。全くの見ず知らずの人ではなく，知ってはいるけど距離を置いている目上の人を高めるために敬語が用いられているという見解と（牧野　1996），日本語話者は知らない相手には年齢に関係なく敬語を使う（Usami　2002），最近の若者は「最初はさしさわりなく敬語を使い，後にはお互いの親疎によって使い分けるという意識が強い」という見解があったが（井上　1999），今回調査に参加した大学生は，後者の知らない人には敬語を使う傾向があるといえそうである。

三番目の基準である「場」を見てみると，今回回答された項目には四つの

「場」が出てきている。敬語使用の「物理的場所」,「対人的立場」,「精神的状況」,「敬語使用の際の話の内容」である。「物理的場所」としては公共の場,「対人的立場」には改まった場，仕事やバイトで接する人と話す時，接客する時，電話で話す時，相手に敬語を使われた時があげられている。そして,「話の内容」には挨拶，頼み事をする時，謝る時，何かを買う時店員に対して，お礼を言う時，基本的にいつも敬語を使うが見られた。「精神的状況」には敬語を使わなくてはいけないと感じた時，敬語を使わないと相手に不快な思いをさせると思った時，気を使う時，気まずい時，自分の立場が危うい時が分類される。

ここで興味深いのは,「精神的状況」に関する「場」に関して，様々な回答が出されていることである。これは本調査に参加した大学生が，流動的な人間関係の中で，コミュニケーションの場に起こる精神的摩擦や葛藤などに敏感に反応し，敬語を使い分けていることの現れであると考えられる。形式的で儀礼的な敬語から，より対人コミュニケーション的，人間関係をよりよくするための敬語への変化といえるかもしれない。

また，興味深い点の二つ目として，多くの専攻研究で指摘されている，依頼の状況などの恩恵関係や負担の有無等が関わる「内容」に関して，何かを買う時に店員に対して敬語を使用するという回答が見られたことである。内容に関わらず基本的にいつも敬語を使うという回答が出された事実も考え合わせると，個々の発話行為の内容よりも，会話全体の状況またはコミュニケーション全体への心使いということにより焦点があてられている傾向を示しているといえるかもしれない。敬語使用がより対人コミュニケーション的になり，敬語を用いる際に，相手との「上下関係」の他に，会話全体の「場」への配慮が必要ということは，ケースバイケースの配慮が必要だということになる。これは敬語使用が複雑化していると見えるかもしれないが，それよりも，敬語がコミュニケーションを成立させるための方略，つまりコミュニケーションストラテジーの一つとして使用されていると考える方が理にかなっているであろう。

4.3. 結果２：敬語を使う基準

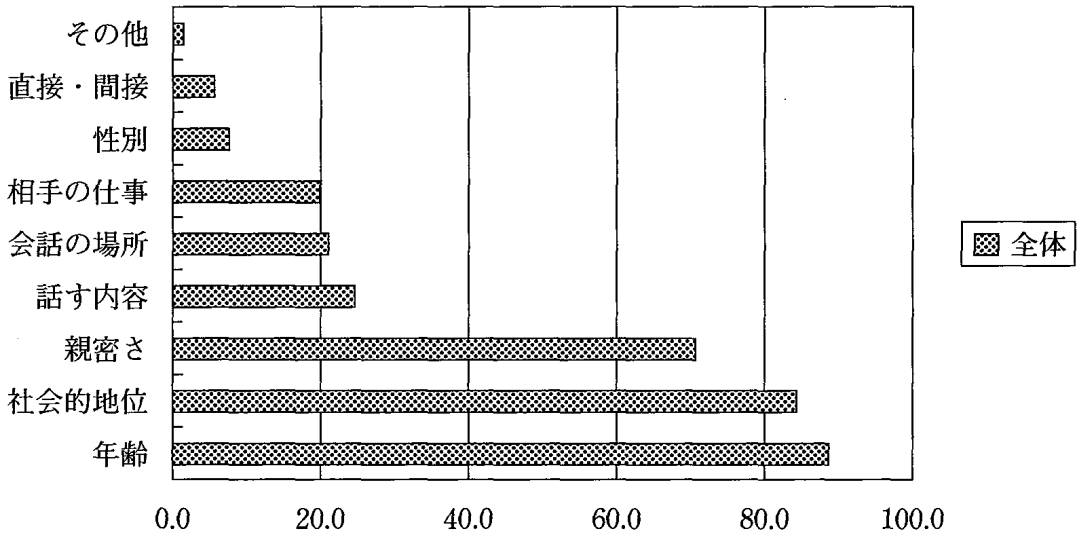
質問２は，敬語を使う基準に関して，「年齢，自分と相手の社会的地位の違い，相手との親密さ，性別，相手の仕事，話す内容，会話をする場所，直接話すかどうか（電話やメールなど），その他」の項目から複数回答可という条件で選択する問題である。これらの項目は，上記の敬語使用の三つの基準を比較するという目的から，「上下関係」：年齢・自分と相手の社会的地位の違い，「ウチ・ソト関係」：相手との親密さ，「場」：性別・相手の仕事・話す内容・会話をする場所・直接話すかどうか，のように集計後分類して考察した。相手の仕事を「場」に分類したのは，相手の職業を社会的地位というより相手のその場での役割として考慮していると考え，「場」の中の「対人的立場」と解釈したからである。そして，性別も同様に「対人的立場」に属する基準とした。表２はそれぞれの項目を選んだ人数を示している。それを割合にして，調査全体の結果をグラフにしたものがグラフ１，男女別に表したものがグラフ２である。

グラフ１の全体のグラフを見ると，今回の調査では，年齢と社会的地位という「上下関係」を基準にしている学生が八割以上いることが分かる。そして，次に多いのが「ウチ・ソト関係」の親密さで，その割合は七割にのぼる。話の内容や会話の場所，相手の仕事や性別，直接話すかどうかという「場」の基準の項目は，それぞれ二割前後にとどまるという結果であった。

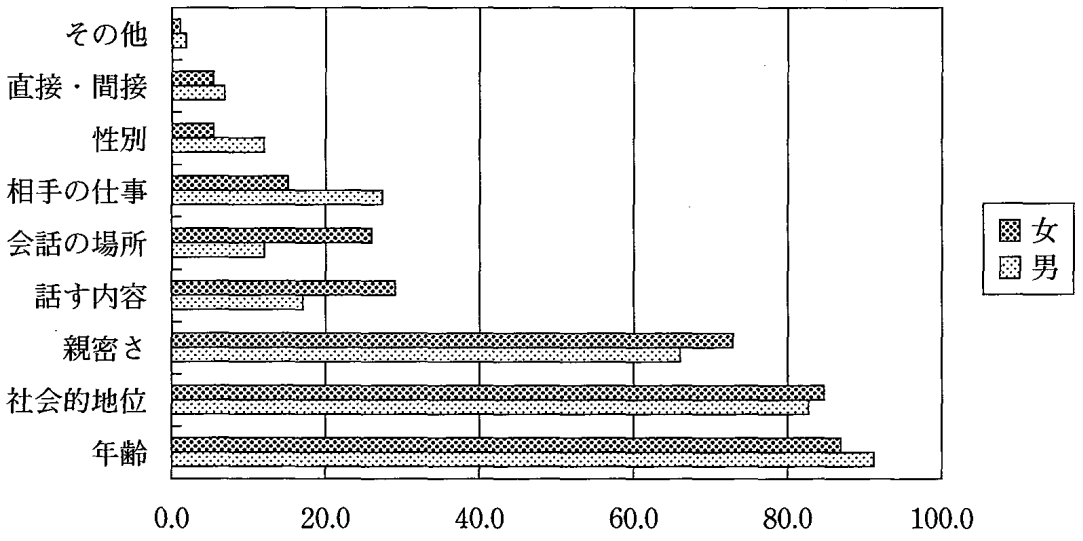
今回の調査に参加した大学生の間では，「上下関係」を基準にする割合が「ウチ・ソト関係」を基準にする割合よりも少し高いことが分かる[1)]。しか

表２　敬語を使う基準

（人）	上下関係		ウチ・ソト関係	場					
	年齢	社会的地位	親密さ	内容	仕事	場所	直接・間接	性別	その他
男性	54	49	39	10	16	7	4	7	1
女性	87	85	73	29	15	26	5	5	1



グラフ１　敬語を使う基準（全体）



グラフ２　敬語を使う基準（男女別）

し，どちらの割合も七割や八割とかなり高いことから，この二つの基準の優先性を考えるより，「上下関係」と「ウチ・ソト関係」の両方が重要な二大基準として大きく敬語使用に関わっていると結論付けた方が，今回の調査の結果をより正確に記述しているといえるだろう。「場」の基準はまだ決定的に敬語使用に影響するとは言えないが，少なくとも，この基準の存在を認めるには十分な数値だと考えられる。

それでは，この敬語使用がこの二大基準に基づいているという本調査の結果は，先行研究の見解とは相容れないものであろうか。先行研究に見られた，「親疎に基づいた左右関係を基準にする双方向的な敬語の使用」について考えてみると，本調査の大学生にもその傾向が見られるといってよい。しかし，「ウチ・ソト関係」の基準に推移してきているという見解に関しては，本調査だけでは明らかにできないと思われる。それは，本調査が，実験的に行われた単独調査であり，過去のデータとの比較が不可能であることに起因する。敬語の基準が「上下関係」から「ウチ・ソト関係」に推移していくのか，両者が共存していくのかといった今後の変化に関しては，引き続き調査していきたい。

次にグラフ２で男女別の割合を観察すると，男女とも「年齢」，「社会的地位」，「親密さ」が圧倒的多数で上位三基準に選ばれていることが分かる。これは，前に全体の結果で見た二大基準が男女の区別なく重要な役割を果たしていることを示している。

ここで注目したいのは，「場」の基準に関する項目の数値にかなりの男女差が見られる点である[2)]。「話す内容」と「会話の場所」では女子学生の割合が倍以上だが，「相手の仕事」と「性別」では男子学生の割合が逆転している。ここから，女子学生は「話す内容」と「会話の場所」により敏感であるのに対して，男子学生は「相手の仕事」と「相手の性別」を重視する傾向にあるといえそうである。

これに関連して，ジェンダー研究で Holmes（1995）が男女の他人との交流の仕方の違いに関して面白い指摘をしている。その研究によると，女性は他の人とのつながりや親密さを大切にし，相互に頼りあい，相手と関わりあおうとする協調主義に立って他人と会話をする傾向にあるそうである。それに対して男性は，自律性により関心があり，自立や独立を求め，社会的な力や地位による管理主義の立場で，競争的・階層的な関係に焦点をあてることが多いという。

ここでの男女学生の敬語使用の基準の違いにも，この男女の特徴が見られ

るとするのは性急であろうか。女子学生がより敏感であった「話の内容」や「会話をする場所」といった基準は，他人とのつながりや関わりあいを築く際に重要な役割を果たすと考えられる。そして，男子学生が重視した「相手の仕事」や「性別」という基準は，自律心に基づき相手と自分をしっかり区別する階層的関係の構築を助けるといえるであろう。

5．おわりに

我々の日常生活において敬語は欠かせないという認識は強い。その事実は研究論文や出版本の数から見ても明らかであろう。本研究ではまず，その敬語の役割と使用基準に関して，敬語には「尊重」と「敬遠」を表す役割があり，敬語使用の際には「上下関係」,「ウチ・ソト関係」,「場」という基準が重要な役割を果たしていることを明らかにした。

そして，これらの基準が，本調査に参加した日本人大学生の敬語使用にどの程度関わっているのかを調べた結果，本調査の大学生は,「上下関係」と「ウチ・ソト関係」の基準をどちらも重要な基準として認識していることが観察された。「場」に関しても，一基準として認識しており，敬語を対人コミュニケーションの一手段として位置付けている様子が伺えた。

先行研究で指摘されていた,「上下関係」を基にした敬語使用から，「ウチ・ソト関係」を基準にし，相手の役割を尊重しながら場面に応じて双方向的に使用する敬語という点は，今回の調査でもその傾向は見られた。しかし，その方向への推移に関しては明らかにすることができなかったので，今後の研究課題としたい。

また，より体系的及び包括的に大学生の敬語使用の実態をとらえるために，調査形式や質問項目等をさらに検討し，敬語使用の地域性なども考慮して，より広い範囲を対象にした調査を行いたいと考えている。敬語使用基準の推移を正確に捉えるための通時的研究も今後の課題である。

註

1) 井上（1999）に「九州は年齢重視の土地柄と以前からいわれていた」との記述があるのは興味深い。地域で異なる使い分けについては今後の研究課題にしたい。

2) 本研究では，調査に参加した男子学生と女子学生の数が同数ではないため，男女差を見る際に割合を基準に判断した。本実験としての調査の際には，この点に関して正確性や客観性などを含め，慎重に考慮する必要がある。

資　料

表1　どんな時に敬語を使いますか？

	男性(人)	女性(人)
上下関係		
目上の人と話す時	10	29
年上の人と話す時	23	41
先輩と話す時	4	4
年配の人と話す時	2	2
先生と話す時	0	10
尊敬している人と話す時	1	4
敬意を表す時	1	1
謙遜する気持ちを表す時	1	1
ウチ・ソト関係		
初対面の人と話す時	4	15
なじんだ友達以外・親しくない人と話す時	4	13
見知らぬ人と話す時	4	13
相手と距離がある時	0	1
知り合って間もないと話す時	0	1
苦手意識がある人と話す時	0	1
親戚と話す時	0	1
近所の人と話す時	0	1
場		
使わなくてはいけないと感じた時	3	5
使わないと相手に不快な思いをさせると思った時	2	0
改まった場で話す時	0	5
自分の立場が危うい時	3	0
公共の場で話す時	0	1
仕事で接する人と話す時	1	0
バイト先との人話す時	0	3
接客する時	1	2

電話で話す時	1	0
相手に敬語を使われた時	0	2
気を使う時	1	0
気まずい時	1	0
頼みごとをする時	3	21
謝る時	0	1
何かを買う時（店員に対して）	0	5
お礼を言う時	0	1
挨拶をする時	1	4
基本的にいつも敬語を使う	1	0

参考文献

〈日本語文献〉

井上史雄（1999）『敬語はこわくない』講談社現代新書

大橋初太郎・林四郎（2000）『敬語の使い方』明治書院

蒲谷宏・川口義一・坂本惠（1998）『敬語表現』大修館書店

菊池康人（1996）『敬語再入門』丸善ライブラリー

草柳大蔵（2001）『きれいな敬語　羞かしい敬語』グラフ社

土井健郎（1991）『「甘え」の構造』弘文堂

野元菊雄（2000）『敬語を使いこなす』講談社現代新書

新村出記念財団（1998，2003）『広辞苑第五版』岩波書店

萩野貞樹（2001）『みなさんこれが敬語ですよ』リヨン社

文化審議会（2007）『敬語の指針』

牧野成一（1996）『ウチとソトの言語文化学－文法を文化で切る－』株式会社アルク

〈英語文献〉

Arita, Y. (2001) A Comparative Study of Japanese and English Polite Expressions : With Special Reference to Request. *Tsukuba English Studies*, 20, 137-150.

Holmes, J. (1995) *Women, Men and Politeness*. London and New York : Longman.

Usami, M. (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation : Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Tokyo : Hituzi Syobo.